
罪深く悩み多き我等

悠羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪深く悩み多き我等

【著者名】

IZUMI

【作者名】

悠羽

【あらすじ】

銀時と土方。

短(?)編集

B-Lであります。

夢で逢えたら（前書き）

受け攻めは固定していません。

作者のノコリテンションによつ~~は~~設定変わります。

夢で逢えたら

・夢で逢えたら

原作設定

もう付きました

「何がそんなに気に入らねえってんだこのクソ天パあーふざけんな
つー俺はもう帰るからなー」

「ああ帰れ帰れ！清々すらりあーコマコリアー」

そう言ってケンカしたのは今日の毎下がり。

きっかけは些細な事だったのに、そこは素直じゃない二人の事。

売り言葉に買ひ言葉でとうとう十方は帰ってしまった。

そんな今日のやつ取りを思い出しながら

「けどよお…、何もホントに帰る事無いじゃん

土方君よお

と呴いても差し込む夕日に吸い込まれて。

ソフアで「口口」寝返りを打ちながら考える事は土方の事ばかり。

ああダメだ。こんななんじや何かダメだ。

「ま、過ぎた事はしあがないつてか」

まるで自分に言い聞かせるように口に出し、俺は万事屋を後にした。

「あー、ちよつと飲み過ぎたんじやねえの？」

万事屋を後にした俺は一人で飲みに出掛けたのだが、飲んでも飲んでも考えるのは土方の事ばかり。

千鳥足で家路を辿る間に考えるのもやつぱり土方の事。

…やっぱ今日は俺が悪かったよなあ…

きつかけはホント些細な事。

たまたま街で見掛けた土方君が、沖田君の頭を撫でていただけ。

柔らかい笑顔で。

まあ土方からしたら沖田君は弟みたいなもんなんだろうけど…

あんな顔見れんのは俺だけだと思ってたんだけどな…

そしてその後万事屋に顔を出した土方に理由も言わばハツ撃たりして…

うん、やっぱ俺だわ。悪いの。

でも謝るのはなあ…

何て考えてながら階段を昇ると

「こやあ

玄関の前に

黒い塊がいた。

何だ」つやと近づいて良く良く見てみると

「ここやあ」

真つ黒い子猫だった。

「何？お前俺に飼われたいの？ダメダメ。ウチには育ち盛りの犬と小娘がいるんだから」

そう言いながら玄関を開けると

「ここ

俺の足元をすり抜けて家の中へ入つていつてしまつた。

「ちよっともうダメって言つてんじやん」

なんて言いながら子猫を抱き抱えないと

真つ黒で艶々の毛並、シャープな体つき、刃色の瞳

…なんか土方みたい。

一度そう思つてしまつたらもう土方にしか見えず。

しかも二つの間にか土方の定位置にさよにんと座つてゐる。

「……土方……？」

「こりゃあ

「……んな訳やねえよなあ」

あ～、俺相当酔つてゐるわ。

頭をがしがし搔いて風呂の準備に向かつた。

風呂の湯が溜まる間に子猫にミルクをやつてみた。

「つまいかあ？」

子猫はチラリと此方を見て、またミルクを舐めている。

その様を眺めていると自然に頬が緩む。

可愛いなあ、おい。

今日は神楽も定春も居ねえし、

「しゃあねえから一晩泊めてやるよ」

「ちよ、『ララ暴れんなつて!』

折角だから洗つてやるつと一緒に風呂に入つたはいいのだが

「ぶにやああ!」

やつぱり水は嫌いなのか震えるし逃げ回るし。

「お前洗わせねえと一緒に布団入れてやんねえぞおお!」

堪り兼ねて怒鳴つたら急に大人しくなりやがつた。

その隙に体を洗つてやり、一緒に湯船に浸かる。

「そうだ、一晩とはいえる前に名前付けてやるよ」

う~ん、タメゴロウ? 黒いからクロ? それともタマ?

トシ とか?

「...トシ...」

恐る恐る呼んでみる。

「二二？」

普段は恥ずかしくて呼べない名前を付けちまた。

ラシ

「にやあ」

「トシ」

「いやあ

アーネストはかつて吾んでゐる。

「土方」

トシは首を傾げて俺を見ている。

「アイツは、土方はまだ怒ってるかな？」

「土方…今日は俺が悪かったよ。」

「…」

「な、んて、お前に言つてもしゃあないか」

と俺はトシと風呂を出た。

と、上がるぞ

風呂から上がり、トシをドライヤーで乾かしていくと、

「あ、」

そうだ

急に思い付いて机の引き出しを開けた。

中から取り出したのは、鈴。

下のババアが温泉行つた時の土産のキー ホルダーだ。

「トシ、じつとこいつよ」

その鈴を紺色のリボンに通し、首に説んでやる。

「おお、お前似合ひじゃん」

頭を撫でてやると、喉を「ロロロロロ」と擦り寄ってきた。

「アイツもお前みたいに素直だったらあー。まあ素直じゃねえのはお互い様なんだがよ。」

「」やあ

「何て言つか…俺ばつか好きなんじゃないかって、土方にとつて俺は別に特別でも何でもなくて…何て考えたりとか、しちゃう訳よ。」

「」？

「やっぱ俺、相当土方が好きなんだろつなあ。まあ絶対本人には言えねえけど。」

トシの頭を撫でながら苦笑い。

「あ～あ、アイツもトシって呼んでみてえよ。んでもって銀時、なんて呼ばれてえよ。」

ま、無理な話だろつがな。

「ホントは俺ももつと素直になりてえんだよ」

ホント、こいつの間にこんなに惚れ直ったんだわ。

「…苦しこよ。好きなんだよ…」

何時から俺はこんな女々しくなったんだわ。

「全部お前のせいだからな…土方…」

「ここやあ」

土方にもこんな風に言えたらいいの。

トシが土方だつたらいいの。

「も、寝ようか」

どんどん切なくなってきた俺は、トシを抱き締めて布団に入った

夢を見た。

トシが土方の声で喋っていた。

俺の頬を舐めながら銀時、銀時つて何度も。

それはとても優しい声で。

舐める度に首の鈴がチリンと鳴って、舌がくすぐったくて、そしてとても嬉しかった。

「トシ…」

「お前えりモタモタしてんじゃねえつー」

「裏だー！裏へ回り込めー！」

窓から聞こえる物騒な声に目を開けると、外はもう明るかった。

「桂ああー今日！」それは逃がさねえぞー。」

よろじと起き上がり窓から覗けば、黒い集団が捕物帖を繰り広げていた。

そして先頭で指揮をとる愛しい人。

頬杖をついて暫く眺めて、はつと気が付いた。

「せうだ、トシは？」

「トシ…」

布団を捲つても、ソファの上にも何処にも居なかつた。

あつと空いていた窓から出て行つてしまつたのだろう。

「ま、元々一晩の約束だしな」

一抹の寂しさを振り払う様に言い、もう一度布団へ潜り込んだ。

ジリリーン…ジリリーン…

次に目を開けるともう夕方だった。

無理矢理体を起こし、受話器を取る。

「はーい、万事屋銀ちゃんでーす」

『今日アネゴがすき焼き食べに連れてくつてゆーから今夜も帰らな
いネ』

それだけ言つと切れてしまった。

「そりかあ…今夜も一人かあ」

また飲みに行くかなあ。

なんて受話器を持ったままぼんやり考えていると

「なんだ、今日はチャイナは居ないのか」

急に後ろから声がして

「つ！」

慌てて振り返ると

「チャイナの癖に気が利いてるじゃねえか

玄関に寄り掛かり、ニヤリと笑う土方が。

「土方…」

びっくりして言葉が続かない俺に、土方はこう言った。

「ああ？ 土方あ？ トシって呼べよ。… 昨夜みてえこよ

な、銀時

何時もより少し優しく笑う土方の刀には、紺色のリボンで結ばれた鈴が光っていた。

ある朝の会話

-ある朝の会話-

「ねえ、」

まだ薄暗い朝方の安宿。

「ああ？」

布団の中の俺は、見慣れた隊服に袖を通す土方に声を掛けた。

支度する手は止めず、土方はチラリと此方を見た。

「ねえ、俺達つてジー ゆーカンケイ?」

「は? 何言つてんだ? てめえ」

慣れた手付きでスカーフを巻きながら返される。

だけど俺は更に聞いてみる。

「カラダだけ？爛れたオトナのカンケイ？」

土方は黙々と支度を続いている。

何となくカラダを重ねる様になつて早半年。

週に3日の時もあれば2週間連絡無しの事もある。

その間、付き合いつとか、そんな話になつた事はない。

ただ逢つて、抱いて抱かれるだけ。

「ただの性欲処理？」

更に俺は続ける。

だつてこれ以上はもう無理。

気付いちやつたんだよ、自分の気持ちに。

「それとも體つぶし?」

「じゃあアレだ。何かの鬱ゲームとか?」

ヤバイ

自分で言つてゐ癪に泣きたさうだ。

泣いてるなんてバレたくないで俯いていると、

「バカかテメーは」

ため息混じりの声がした。

「だよねー。何の意味も無い事がなににねー」

少し震える声で答えて、それでも顔を上げられずにいる俺に土方は告げた。

「…何でその中に』俺がテメーを好きだから』つて選択肢がねーんだよ」

好き？誰が？誰を？

えええつ？

ハツとして顔を上げると、土方は準備を終え出ていく所だった。

「今夜、行くから予定開けとけ」

やつ言つて出てこく土方の頬は少し赤かった。

その後ろ姿を暫く眺めて、またもそもそと布団に潜り、漸く俺は理解した。

『ひょっとして… これって皆山つてヤツうつー…』

マジド？

期待しちゃうよ？

あー、銀さんニヤけかけやつとですナビよ！

そして俺はいそいそと万事屋へ戻り、土方の為にマヨネーズ料理を作りうかなんて考えるのだった。

- 路地裏の悲劇 -

がさり…

身を隠している植木が思いの外大きな音を立て、心臓がどきりと鳴る。

気付かれたのではないかと標的を見れば、

「あら、パーソンじゃない」

見た事無いようなモンスターに話し掛けられていた。

しかしあけにアゴが特化したモンスターだ。

危険か？

斬るか？

そう迷つてこるつつか、とにかく、標的は一瞬一瞬モンスターと会話を交わしながら標準歩き出した。

俺は植木から素早く抜け出し、建物の影から影へ身を隠しながら標的を追つた。

静かに、気配を殺しながら影から影へ。

『これじゃ鬼の副長じやねえか』

心の中で呟き、舌打ちする。

ちなみにこれは偵察の仕事ではない。

んなもんは山崎にやらせつやあい。

『ああ、何でこんな事になつてんだ』

今朝の巡回の途中、前から歩いてる来たアイツを見付けた。

今日一矢は想こを吐げる。

そんな覚悟で屯所を出ていた俺は咄嗟に建物の影へ隠れた。

通りすがりを路地裏へ引き込んで告げようとしたのだ。

しかし俺も気が動転していたのだろう。

気が付くと、アイツは通り過ぎていた。

しまったと思い、何とかチャンスを窺いながら後を付け始め、今に至る訳だ。

『しかしホントうひうひのフヨフヨしゃがってあの天パ』

想い人であるにも関わらず悪態をつく。

『一体何の目的で何処へ向かってんだ。ってか誰だその男…ヤケに親しげじゃねえかあ！あつ、肩なんか組みやがって！俺の銀時から離れろやこのマダオがああ！』

叩つ斬つてやる…

そう思い、刀に手を掛け路地裏から飛び出せうとしたら

ドンッ

何かにぶつかった。

低い姿勢で飛び出した為か、田の前に見えるのは黒いブーツ。

徐々に視線を上げていくと。

白い着流し。

腰に木刀。

この辺から背中をイヤな汗が伝い出した。

片腕を抜いただらしない着こなし。

紅い瞳。

ふわふわの銀色。

「何人の後コソコソ付けてんだ。ストーカーですかコノヤロー」

みつ、見付かつたアア！

「あー…いや、その、これはだな」

チクショウ、上手い言い訳が見付かんねえ。

「やっぱストーカーの部下はストーカーですかあ？」

「てめつ、俺を近藤^{アコト}と一緒にすんなああ！」

いや、待てよ十四郎。

これは逆にチャンスじゃないか？

廻りには誰も居ない路地裏。目の前には想い人。

今だ！言つんだ俺！

「あー、俺はただ、お前によお…」

何？という感じで首を傾げ俺を見る銀時。
そんな顔すんな可愛いじやねえかあ！

「お前に、よ…」

顔が熱くなるのが解る。

やべえ、何て言やあいいんだ。

何も上手い言葉が見付かんねえ。

銀時は腕を組んで、俺の次の言葉を待つてゐる。

「その、だな……」

あああ、頭の中が真っ白だ。

何でこんな窮地に立たされてんだ。

敵前逃亡は士道不覚悟だと解つてている。

だが……だが言えねえ。

たつた一言でいいの。

「つ、何でもねえ」

言つが早いが俺は走り出していた。

「え？ おーい大串くーん？」

銀時の声が聞こえたが俺の思考回路はもう限界突破。

「今日の事はぜってえ忘れりよおおーーの糖尿天パがああーー」

チクショウツー！ こんなはずじゃなかつたのにー。

叫びながら、泣きながら、俺はひたすら逃げた。

おまけ

走り去る土方を俺は暫く眺めていた。

「…何だつてんだ」

頭をぼりぼり搔いて、またふらりふらりと万事屋へ戻る。

アイツが今日言おうとしたことは大体予想は付いてる。

そんなの、毎日アイツを見てたら解る。

ふとした仕草で、田線で。

「ホント、変なところで臆病なんだよなあ、アイツ」

言えぱいいのー。

俺はせつてえ断らなーからよ。

スノードーム（前書き）

-スノードーム-

スノードーム

やく…やく…やく…

俺はただ、歩いていた。

一面真っ白な世界を。

前を歩く男の白いブラウスが雪に溶け込む。

しかしその手は俺の手をしっかりと握り、

背中は吹き荒ぶ雪にかき消されそつで。

「どうか、このまま…」

小さな咳せき届く事無く、俺は肩に掛けられた隊服を強く握った。

昨夜新ハガ万事屋へ電話を掛けてきた。

『銀さん、神楽ちゃんが…』

定春と雪遊びで山へ行つたまま帰らない、と。

『雪も強くなつてきてるし、またか何処かで道に迷つているんじや

…』

俺は万事屋を飛び出した。

やべ…やべ…やべ…

前を歩く男が此方を見ずに言つた。

「寒くねーか?」

「…………うん」

お前の方が寒いだろ、なんて言えなくて。

・神楽を探しに出た俺は案の定迷つてしまい、山の洞窟でしゃがみ込んでいた。

「…………寒い…」

感覚の無くなつた指先を吐く息で暖める。

外は一寸先も見えない程の吹雪。

思い出すのは想い人の事ばかりで。

ああ俺、此處で死ぬのかなんて冷静に考えた。

愛煙家で、マヨラーで、口の悪い、でも優しいアイツ。

伝えられなかつた想いは涙に変わり

「…ひ、じかた…」

こんな事なら伝えておけばよかつた、と少し後悔し

俺はゆつくり目を閉じた。

「もつすぐ麓だから

その声にまつとして前を見る。

少し此方を向いている顔は、優しく微笑んでいて

「…うん」

俺は俯いて、繋いだ指に力を込めた。

…すや、…万事屋！

遠くから声が聴こえる。

「万事屋……銀時！」

ああ、これはアイツの声だ…

じゃあ今、肩を揺さぶつている手もアイツなのかな。

だつたらしいな…。

まだはつきりしない意識の中でそんな事を思つ。

「銀時…しつかりしろ…」

一層激しく揺ゆかされ、はつと我に帰った。

まだ重い瞼を開けると

「銀つ……良かつた……」

震える声で強く抱き締められた。

「ひじ……かた……？」

小さくその名を呼べば抱き締める腕に力が入る。

「ひじかた……」

その腕が、声が、体温が、土方の想いを伝えてくるよう

切なくなり、また少し泣いた。

やく……やく……やく……

「なあ」

土方の歩みが、少しだけ遅くなる。

「もしも、」のまま…」

口籠る土方。

その先は聞かなくて解る。

だつて俺も同じ気持ちだから。

だけど…

「それは出来ねえよ」

もしも、このまま一人で居られたら

そんな願いを叶えるには、俺達は守る物が増えすぎた。

常に争いに身を置く土方にとつて俺の気持ちは足枷でしか無く、そのままのせいで命を落とすかも知れない。

やつ思ひと気持ちを伝えるのは躊躇われ、

そしてきっと、土方も同じ事を思つていてる。

解つてゐる。

だけど、だけど

「ださーーー、やつらしだけーーー」

目を伏せ、深く指を絡ませると、

「ああ…」

より強く握られ。

そこから土方の想いが流れ込んできて

胸が苦しくなつた。

「…ん…やあ…」

「銀さん！」

「トシ一！」

遠くから声がする。

そしてだんだん近くなる。

俺達は顔を見合わせ微笑み合い

静かに、決意を込めて指をほだいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5161z/>

罪深く悩み多き我等

2011年12月19日17時53分発行